燕石十種

江戸節根元記

四輯

參

1 甘 1
679
34

679
34

宮城縣圖書

江戸節根元記上卷

大薩摩節　小薩摩節　外記節　式部節
土佐節　浩富節　永閑節　肥前節
半太夫節　河東節

附

加賀太夫節　儀太夫節　一中節　三中節
國太夫節　文弥節　園八節　新内節
井上節　豊後節　隆達節　古今節
道念節　桐山節　説経節　長歌

江戸節根元由来記

小野のおたつは織田家の侍女なり信長公薨去の後浪人となりの家の形を示す人作りて作りなすは大閤秀吉公の薨年也由を問ひ聞きて
感ずるに堪へず終に出家なりぬ或時秀吉公つれづれのあまりふと作り給
ひしと伝へ聞くおつう豊の矢さきの長歌浄瑠璃姫容儀うるはしき
九条竹の道ゆるらうたき夫婦源国の内ふかしづきおひ立ける母心にて四
の五の歌は曽子牛若君奥州の折うき世のなごりとする
一節前りて浄瑠璃姫の琴の音ふ姫の浮へ思ひをせめ事ども
筆ふ掻文ふ法ふ源氏十二帖と云物ふ法ふりて上覧ふ入奉る大閤是を九
覧し筆作文法伊勢物語ふ似ずりと感じ給ひ中ふ増ふ命じて
岩船捨校ふ音節を消さるべふ岩船是を法角流聖母捨校ふ作へて
浄瑠璃節命じて一曲とし是ふ結ふのちふ初まり就中節の所ふ味を
加へ今は四季を四人に分て絃面長千命と云ふの行ふ高砂布洞流田芸屋

長三郎事ハ瀧野撫校ハ山田を終へ妙音を切ごとく人々奇なりと感自ら郭廻
ニ云一曲を作り〳〵とうたへ爰ハ古字南無阿弥陀仏と以ハ妙女何事か給りん四条河
原ニ出て初て浄瑠璃十二段を語りて貴賤の耳をおどろかすこと曲を都
鄙一統ニとなりて旬日を積ミ日を重ねて名ハ高く鳴ハ名ハ南無
阿弥陀仏高く鳴の時ハ音を鳴の時ハ音を作り是ハ十二段の浄瑠璃節をかなでて語
り出るよ〳〵作り初語ふ節を時て浄瑠璃と号し〳〵名世ハ時ハ〳〵
後瀧野清侯ハ仕へて南部ハ下り瀧野勤のひまハ〳〵ハ士家高部ハ交り
義中ハ移心七郎ハと以ハ町人瀧野の妙曲ハ感して深く望て師弟ニ成り
時義を学へて東部の一風ニ又ハ平家と云者瀧野の弟子ニて京都ハ
ゆきて七郎ハの助音を語ハ是ハ関の東ハ語ハ〳〵ハ名ハ清
ニ以ハ人古能の文句を作ハ小平太ハ是ハ節を付て語ハ上手
人形ハ今て奥羽を七郎ハ上手ハ丹後掾と号ハ
掾と号候ハ

移七郎ハ事
丹後掾
伊予助
肥前掾
薩摩掾

丹後掾事
長門太夫
半太夫事
虎之助
清五郎

大門源ハ
瀧田半之丞
近江太夫
清五郎事世ニ名品郎と云ハ人ハ
名品郎ハ
小太夫
半平太
次郎ハ

半太夫事
丹後掾
和泉太夫

三郎ハ

丹後掾
虎之源太夫
大源太夫
小源太夫

長門太夫嫡子ハ出家事
外記太夫
源次郎
九内後ハ通して
弾左衛門と云
半太夫

九平太
清五郎

近江太夫ハ通して
語齊
近江郎ハ
休

九市九郎ハ
永休

長門左史事ニ虎之助事
古佐左史
本苗移田也

小源左人道ニて
虎盛永閑

長門左史弟子
肥前掾

肥前左史弟子
初左史
入道ニて
後宮内苗坂本

半之亟弟子
江戸河東

弟子
円道左史
虎之助

弟子
喜源
古今名人ト
世ニ知ル

弟子
初左史

弟子
宮内
早世

月
半次郎
後左史

月
半三郎
後高安

弟子
喜教
後郎大法ト改
河丈
後河東

菊助
夢芝ト改長次郎事

弟子
乃左郎
後慶流弟子

月
左左史

月
小左史

月
源左史
素人ニテ知名
世ニ知ル

月
吉左史
左左
左助

月
竹之助
後小源左史

子半之亟事
肥前左史
吉左史

弟子
善左史

月
半之亟
世ニスグレル名人
半之亟弟子
後河東

月
初左史
文次郎

月
忠左衛
夕丈

右三人同門ニて相ならぬ上手ニて諸芸ニ河東ハ小田原町ニ住し天満屋と云
魚販ヲ子ニて本苗河新蔵ナリと云四ツ河蔵と名乗しを堺町住風と云者ハ
蔵と以字を改東と云て云ふ河東と云る

半左史操狂言流物

一 源氏十二段
二段目小六捜見物語
同 四季の調
一 生贄
三段目道行
一 櫻狩
三段目 ろく
一 弓張嘉根
三段目 ろく
五段目 ろく
一 日蓮紀
五段目 山の段義
教化の事ん
一 後草帷子黒小袖
三段目 ろく
五段目 ろく
一 女ひきん
三段目初断茶屋ろく
四段目ちらし賣
一 女敵勇士鏡
四段目扶の茶屋ろく
五段目忍ひ茶屋
三段目 花賣
五段目後五人男
四段目 ろく
五段目 ろく
一 歌枕
三段目 ろく
一 和泉城
二段目 湖伏
三段目 起請文
同 猪鹿家ケ
一 丹波与作
初段 雪大寶
三段目 ろく
馬ろくの段
一 夜目遠目笠の内
四段目 大和屋ろく
五段目 京ろく屋
同 大和物ろく
一 条舎曽我
初段 祐家南乃四郎
三段目 髮撫
五段目 虎ヶ磯ろく

一 出世盛久 四段目法印光長の
五段目十界の図相伝

一 全盛揚巻 五段目清雲の
口段目揚巻の
後ニ踊り名代花の扇取直下ロ又二段目
口説の舞

一 神力小袖治初午条 初段金輪の段
二段の信田の白狐

一 聖代時津風 初段金輪のくん
二段目清貫の同打打の段附小ぜちり段
笠の早ん種の段後ニ踊り

一 名代 高ニ情ハ衛士のかゞり火
仇ニ恨ハ三ツの狭箱火 蟬丸紅葉今

一 會合源氏巻安宅 三段目土佐井筒の段絵捕
六段目女帝名残きひとゝん

一 禁中綱引合 二段目鬼神探
四段目碁の糸遊の

一 古今七人男 三段目赤男の花見
口段目巴山吹の

一 京橋中橋お茶の紀
同流嫁さくら 関東小六
三段目花軍九段目義の糸遊の二段目
ふるの初雪

一 御名の恋恨
放下僧 初段温泉場
三段目の治郎の段
四段目 對面の段
裝束の段 糸かつこい者同乱事

一 平安城都宮 四段目華花合酒天皇惑の段
六段目縁起の同みさ目の糸の

一 京清雷問答 四段目京清の
五段目京清牢破

一 愛恋明神上人 三段目七夕祭
五段目父母の

一 忠臣京土産 二段目馬木責
三段目牛若丸の
拍歴の素之六段目金山拍子

一 虎ヶ谷 嫁入五人曽我
少将がさ 梯
二段目鶴の三段目元服帯刀五段目禅坊
協強

一 西行ハ昔江口の
今ハ長者 傾城旅衣
三段目五右衛門江口の遊

一 吉日袖曽我 初段幟紋の三段目
女髪結同かみをき
四段目女敵面のくん同梶原軍附矢切
いろさ

一 好色柴の助 三段目清見八景
五段目稲荷の勧請
ゼ弟より鹿島名古屋ゆきを動ん

一 心階矢将色遊び 三段目左矢将色の段
同名後の五段目
歌上の園寺の段
やき同

一 かゞきくん 三段目六郎り寺の段
五段目豆上の
六段目清明の

右ゝ分焼失のお三流

一 百日曽我 三段目傾城清水
五段目虎ヶ谷扇賣

一 貞任責 弟事あり
伊達姫道の

一 名古屋 三段目かゞき房ゆり

一 和國美人哥浄ひ 三段目山袖揚枝
五段目天狗物

一 井の頭姫ゝ女
編もり日ちん 即心猫役 三段目公家の段
行平須磨流罪
の事

一 三段目切合三宝相方

一 下り 三宝

一 初段櫃折天皇三宝

一 登り 三宝

一 愁 三童　四季の調　楊姫　蟬丸　日蓮記

一 別を　二童　一 山入　二童

一 押るをくき　合三童口傳　一 習い事笛の所

一 四季の調　一 姿見の所　一 教化の所　一 和泉の城

一 定元道行　一 蟬丸　一 新清水　一 清明道行

三絃れ續由緒

一 源孫　育人　一 日喜　齊　一 平左衛門尉　天下一平左衛門　一 平左衛門尉　一 平左衛門尉　基左衛門尉

一 左衛門尉　杉田平五郎　一 基左衛門　一 八郎　公郎主殿助

一 源左衛門尉　木村又八　一 又八郎　村上源四郎　後に石彦と改　一 山崎源左衛門　紀氏西半左衛門尉

丹波和泉左衛の頃より三絃撥左衛と申し石彦銘有之絃所持して居りしに元

年ふ成し後源四郎粉年怨望せしの御心ゆえ悦の余り本苗村上改扇八郎の浄

瑠璃節竹馬を彈たのち節ふり石彦と改名を元来八源四郎中世左衛門の

操命の粧の唄を彈居りし四本村又八郎と称て世左衛門も芸熟の芸所

祖河内の松の内を語りし時分初め左衛門と改名を好半左衛門の内

後或は左衛門と改を好半左衛門の内彼者を加へ新浄瑠璃の節

付せし源四郎も或は節を見所りし四新浄瑠璃の節を武級節の自新り

くあるふふ様て世左衛門と称かく語り方彈方も遠ふ様りるもきあれとも

此流の節事ふ一新遠ひ語ふ近世の藝半左衛門の一新を不知て

遠ふ様見しは遠ふ様に有左衛門を不知之中廣く河内と門人に道行ふ

流ふ少も遠ふ源四郎新ふ又八郎ふて世左衛門を勤居りし四

半左衛門の浄瑠璃ハ不残見居りし四源四郎と得と出会ふ不聞して源

四郎彈方ハ一流の様ふ見しハ歌ふハ歌之浄瑠璃ハ何流ふふ様撥を新と様ハ

能左衛の能ふして節事ハ時ふ小彈の如し基盤右を用ひ然ふ近世撥を

節し太夫三絃人形の妙はなくて少し斗りの節事のみ要とするハ能太夫の
能を不知小謡のミ唄ふ如しかかる類ハ元祖出太夫紀太夫其子を紀太夫
と和らけて語りたるものあり去ルにより肥前永閑のおち滞る不知して半太夫
節弾とハ云ぐるし又河東一統も半太夫節を和らけ武部節の心を以て語りたる
ものなれバ半太夫節を能不知してハ河東節弾くと云ぐるし而山清源たるよ
なりとて肥前永閑半太夫節の流派をしりて操の一派を覚へ人形のべんたく云
当劇中古三門　清助なと　当今古半太夫　竟教　薩摩　左内　なとあるまじ
て其外覚へて心身を労すといへども元来不備にして　其笠にかかる五十日近く
老年成就雑物事を斗り元文九辰年四月十五日　牧越移りし　三絃中子を渡し
遊に懐きし語る三絃浄瑠璃唄の本を覚えし　書画に近一所に焼捨て後に
其の静成を楽とせし小我数年此度に労せしを痛く　語ることあたる　長崎　立大坂　其外
諸ろる人と一章一句を送らずして　其志難捨座　椿にありしをめしハ此方の志す要鳴
呼古代迄人人形のめくり遊び遊して　如斯ハ大慶なること　江戸操の正しき格式を

知る者なく世を経ても何ぞあるべき　犀ハ角に死し虎は皮が死し　熊ハ膽に死
し孔雀ハ尾に死を我ハ三絃に死せし　甲斐もなく一芸とてもなくて　止めるぞ毛
ものにもたらぬたる身ハ因果ぞやいかにも命なきと云べき

世ハ口をきらみに芸を身を助るともいふ事あれど
芸ハ身を助ると云ふも好てやる身ハ為にもせで　浮名のみにて
かく認めて書き置く送りしを如何なさんや　市村羽左衛門　尾上菊五郎　御自分
此節に至る事なるかハ珍らし古渕なれハ写　絵ハ此度つくり鑑定ある芸道
に深切なるを感じて　叶ハぬ筆をうごかしぬ　此書物後見成るときその恩ハ自分
清くなき　筆を深くも　益秘を重ねる所迄と申ハ軽き霞夕陽去りし此身なれハ
唯をり　秘ん　跡のかたみとも　と思ふのみ

かきおくも　あとの　たりし　思ふ
とも　よ　ゑ　うきと　なる　なりふし
あらの　紫の

寅の年十二月認め給ひ給ふ氏より能味富喜へ送り来る浄瑠璃富喜事十寸見
右十郎と改め回人門弟者也道理を聞へ濃り文言あり

可柳

信長公北方女の姫のおつうに秀吉公の女之後ふ秀吉公の公廣郎ふ付へ系図矢作
浄瑠璃姫の事を作る峰の薬師の中より出浄瑠璃姫と名を付へ十二神
をかくと云十二院と云浄瑠璃物語と云平家物語い信濃前司行長作者也
仏説琵琶法師節を付て浄瑠璃と云て流行る沢角右衛門検校三絃
合て曲節を語る又六字南無阿弥陀と云女者共四条河原ふ芝居を造り夢を
のこる人形ふ合く節へ敷語を及へり上るり者の文句を載る事ふ而れ
ども京大坂江戸ふ浄瑠璃者多へ有へ伊勢島ふ平角右衛門文弥江戸
油屋義兵衛宮節与吉島原次郎吉大薩摩ふ薩摩掾へ掾へ源氏を始者共
節紀州和歌ふ宮内と云所のもの江戸ふ宮内ふ宮内と云者共者共と云道名
琴の者也文句を載き加賀掾好流と云て風を能者人の都ふ入り大坂井上郎
井上郎と云者之道を達へ京大坂ふ呼り浄瑠璃者之文句を井上

播磨掾茂兵衛と名乗る大坂義太夫節天王寺辺の民也初ハ天王寺五郎兵衛
と云西京竹本文字太夫と語て天竺姓氏を始て近世名人と云後大坂を竹
本義太夫と改芝居を多願へて竹本義太夫と称ふ敬ふ者
を世と云敬ふ者

浄瑠璃節正保頃薩摩太夫次郎左衛門と云江戸浄瑠璃の祖者り法師
浄雲と云て又薩摩掾と云次郎左衛門と云
浄雲ハ丹後太夫長太夫摂津太夫源太夫四人ふ行り是ハ四天王の太夫と云
今の浄瑠璃浄雲ふ初る
江戸語節を近江太夫と云丹後の中の人
江戸肥前節長門太夫弟子者
江戸分江節ハ薩摩と云二代目薩摩と次郎左衛門の中者
江戸土佐節虎ふ伊と云二代目薩摩の中者
江戸永田節源太夫弟子者

江戸半太夫節 初名半太夫ト云 修業者何流と云ものゝ事之初めハ説経
祭文の名人なり 肥前是を學び江戸節を進めて門に入後に一流を語り出し
其弟子なり 堀原市左衛門と云ものゝ半太夫座の作者なり 半太夫ハ剃髪して
坂本梁雲と云 東武近世の名人之今以此流義不捨なり
江戸河東節 小田原町江戸納屋天満屋藤左衛門悴藤十郎半太夫門弟となり此者近
世名人也一流語り出し藤十郎之江戸納屋も親譲り母の里江戸花前にて河東氏也
うちに同居して居たりし也 河東と申ものハ前名を東と名字を書替事
出し其河東弟子河丈 是ハ吉原町大門前に居たる下以る者之二代目河
東ト成り 二番弟子夕丈事二代目藤十郎ト改名を此時一流二つに別藤十郎かく之人ハ
三絃山彦源四郎并河東方之ハ三絃十寸見東吉并双方芸職の者 其外に都合
留之藤十郎後に法師して栄軒と改名越辺の江戸屋敷へ三十人扶持にて醫術抱え
其後祀扶持 楽事ハ醫術学問遂 其外 源苑と以る者なり

半太夫弟子
天満屋藤十郎

弟子 藤十郎

弟子 宇平次

弟子 錦 源内

元祖河東

二代目河東

三代目河東

四代目河東

宇平次 二十日節
本石町十軒店之
五代目河東

同人弟子忠次郎
十二才の時より宇平次方に同居なり
六代目河東

忠次郎 弟子傳蔵
七代目河東

元祖河東弟子夕丈
二代目藤十郎
後栄軒ト改名

栄軒弟子
三代目藤十郎
出生深川之根津茶屋次郎兵衛と以る者之三代目宇平次死去の後河東と改被
読東作と以る名を返し能味富数と名乗る栄軒より藤十郎と以る名を
貰たる此者至極の名人なり

同
初代蘭洲
数寄屋江戸町一丁目 屋
次郎事

三絃 木村又八弟子
元祖源四郎
山彦と以る三絃が株なり

宇平次弟子
二代目蘭洲
剃髪して志明と改 苗
又四郎 寛政十年八十三才死去

又四郎養子
三代目蘭洲
池の端仲丁 と以者の悴 又次郎と云者之初めハ
東作と云 栄次と改め剃髪して俳諧
と改名ハきそ と云

弟子 三河町
河良

同 三田
秀孫

同 岡本町
和蝶
後藤十郎

同 尾張町
百次

同 浅草
孫四郎
剃髪して清丈

同人弟子
良志
後秀 ト改

源四郎門弟 長蔵 後秀次郎又後源四郎

池の端拵師番 二朝 此者八寿と云三絃不持なり 寛政十二申年七月死去

宮々の門弟 宮々助 後宮々助と改

田沼邸門番 宮々助 後宮々助と改

源四郎門弟 半次郎 寛政年中死去

源四郎門弟 文次郎 後源四郎

吉原大門角桐屋伊助事

源四郎門弟 文四郎

源四郎門弟 新九郎 天明の頃名を後又山尭と名乗る

田沼邸神下 長蔵 池の端仲町表横町松本事

源四郎門弟 二代目源四郎 後剃髪して存候と改寛政年中死去

人形 三代目源四郎 寛政年中柳橋河内屋半次郎方ニテ名弘の母ゆ

源四郎門弟 初代河良

浅草神社内 二代目河良

門弟 良波 後河良 此者国と云う三絃不持なり 天明年中迄浅草方へ堀を又本こ三絃持参なり

門弟 良波 後河良

門弟 良波 後河良

赤坂明神前 波暁

東盛藥研堀 三代目河良

小源次 浅草世間と云三絃 九の門内に居住ス上ル

門弟 良浪 浅草品川楼部 享和三亥八月死去 池の端

良波 此者山尭ト以長年三絃不持ル二一寸ト以ル三絃なり

秀波

浄瑠璃番附

初代竿之丞 三番叟

門弟 糸會曽我角力物語

門弟 夜目遠目笠の内

門弟 大和々助

門弟 同虎が將道ゆ

門弟 同三陸目覚撓

門弟 京とらべ

門弟 好色ゑを助々陸 門弟 清見八京

門弟 初力小振治 初午糸り

門弟 名波の光

門弟 同伝田道ゆ

門弟 同狩り楓

門弟 忠臣蔵産

門弟 同忠太夫

門弟 同金ゆ物語

門弟 丹波柴作

門弟 おせん道ゆ

門弟 金盛拵物 四季の手本

門弟 波草帷子 忠小袖

上 牛若丸十考糸 道ゆ 板暦ニ子

門弟 波草帷子 忠小袖

同 物狂
平安城物語
聖代時風
四段目清貫道行
後の聲り名代
安宅能踊
傾城孫長
江口道行
和國美人
寄物
扇灯敬
有馬 帯
美しの法ぐあ
甲 子
初春賀

初瀬糸道行
同 草花尽
初段金瘤
同 行平の段
京清 雷同言
天皇忍ぶ段
三段目道坂
小ぶちりの段
蟬丸紅葉今
三段目元服
常川
真任 責
伊達姫乳切
五段目天狗揃
幕絞尽
ぶと常
春の空
鶴のあゆみ
袖 鏡

京清道行
仲敦行
琵琶の段

五段目
禪坊坊説法
即心猫股
三段目公家ぶ段
日蓮記五段目
日蓮山入
十帝髪撫
みつのはさ
おかめ笠物狂
東の雲
ちぶ道行

女髪結
せい〜曽我
風呂屋曽我
絵双 賣
明鳥江戸の花
結髪道行
蓬 来
小 前
松の内
江の〜島
狂女道祝
男結常川
竹馬踊

道中双六
封し文
巴ぶ吹道行
笠物狂
縁のもこ板
敦盛温泉揃三段目
かぶこ
松の後
丹前里神楽
隅田川解の内
酒中花
貝尽し

形見送り
二人 尭
義経道行
蓬性乳切
源氏の巻筆
里言葉
蓬来尽行
竹馬の鞭
扇八京
彩世常
鶴の橋小袖
神楽物子
雛の磯

袖きてふ
浦島道行
明同の乳行
菖蒲草
子砂
三輪の心
鯉の滝
碁
尭万歳
雛の出巻
水鳴蝶羽書
唐国扇
卯月の里

虎が文
助心中たゝり
初音ゝ高銀
一流川
花形見
柳の紙雛
夜の錦
濡浴衣
白ゝ
廿日の月
常陸帯花柵
傾城返魂香
老の雪

ちゝ
百歌猫
十寸見櫛
駕籠蒲団
浮世
不二筋二重扇
口舌の縁
濡扇
小栗堂夢聲
糸操の版
子年の枝
四季ゝ屏風
雪の二葉
元祖源氏物語
十七回忌遊芸

四き流
七種
花ゝ里
いせほの名所絵
矣ちへ
傀儡
羅の弾
男の黒髪
いの字扇
常盤の文
為朝反魂香
道成寺

さゝら屋
桜の曙
助六花ほう
二葉草
出羽の竹婦人作
伊吉踊
ゑちの柳
乳袋歌の
あみがさ
相のこ
助六廓の
花みち
御田

右者夜半樂紅葉集ゟ十寸見要集ゟ抜書

一 芳の門ハ浅草猫程ゟ夫と河岸被譲ゟ成初て出来る此れのゝ元の起りハ新吉
原三浦屋行業ゟ出ゝ女郎享保成年正月元日戌の日ゟ出ハ中の町へ年礼に出
ゝ付ト紅ゝ中の町を引ゟ行ゟ浅草ゟ流ゟ来る美しき新造花魁
まて氣の毒ゝ思ひ合ゟおいらん〳〵と称ゝ茶屋へ猫を呼ゟ時ゟ引ゟ
さて〳〵と皆〳〵おもひ合ゟて漸ゝ行ゟ茶屋の名ゟて猫鼠の名ゟ
〳〵付ゟの女郎ゟ抑三ゟ重ゟ孫ゟ世〳〵ゟ代ゟ下ゟ下ゟ上ゟ
行ゟ合ゟ踊ゟて来ゟる打抑ゟて内ゟ帯ゟを包ゟみ行ゟ上ゟて来ゟ来ゟ
ゟ来ゟ氣ゟ皆感〳〵竹婦人ゟを七種ゟの名ゟ作ゟ杵の内と名づけて大ゟは
ゟ〳〵ゟと古ゟ女郎の中級ゟ以上ゟ事ゟ有ゟ来ゟ
雑集ゟて撰ゟ出ゟ有ゟしゟどの大入ゟ京ゟ元祖河岸ゟ三浦ゟ抜都ゟ
ゟ来ゟ源ゟ郎ゟ浅ゟ猫ゟ河岸ゟ

一　侍呂祭俄儡師此二段の浄瑠璃ハ元祖出来上りの時々かしらの外ニ記念ある
とも面白き節事也し出し今ニ至り語りしと之
一　此浄瑠璃ハ新吉原角町字屋ニ玉菊といふる女郎行り元来心ざしあつて
此玉菊の気ありて十八ニ而情深くあるきえくきが為にて何く諸芸能心底
の直なり諸事しくいふものなく茶屋妻之文使のよふなるものまでも情を
かけし之客ハ勿論心実深く振といふ事もなく数々の心も尽り節じし之此玉菊事
二十歳の時病気付けるに神社仏閣へ参詣百度祈祷祈念所々の代参人を立之
と加へし名ある医術を遣しなく療治を尽し候へ共漸く病気平愈行り四花
患門の灸治致すべしと医術中なるに玉菊ハ却て灸事のうち半太夫河東節
此浄瑠璃を聞きながら灸をすへしに此由を内證より聞し人ハ承知の者共日限を極
め稽古をし此時家内の女郎共仕舞仕切りても不残うちぬき上るり聞に来る人
之ハ吸物酒肴取揃出して出し施しとなり誠ニ貴賤群集して賑く諸事
を語り尽しいろいろ其より後廿五才の時まで病気ニ而終ニ其ニ草葉の露と消

うせぬ此時悲歎しける者ハ多く皆く袖をしぼりたる扨其年七月も近く玉菊
此新盆ニなり思を残しものニ思送りに燈籠或ハ灯籠切子挑灯を出し玉
菊追善此賑ひ諸事貴賤群集せし頃ハ享保年中之事なり吉原燈籠
初りしなり
一　碪此浄瑠璃山田町山貞庵の一節を此者ハ新枕ニ入る風ニ初める時流行ニおかる
山中宿にて浄瑠璃をつとめ行り貝五才叟人をも見れハ賤女壱人居るハ彼女を近づ
き尋けるハ此山中ニ只壱人住居し給ふらんといひやさしく問けれハ賤の女答ていやさし
くも尋給ふよ私夫事ハ当吉原の仕事にかゝりしが今ニ便りもなく待暮し侍ハ何ん
便なく寸志もつきる事なくむなしく月日を送り宮子同五十日程も成りけれ
ざるハ不思議なりとて是を二三日の留守ニかゝしも淋しとおもひし事なく此程の
心がゝりに秋ふかき谷山の風より外にもなく碪の音は身ニしみしハまのおとつま
なく秋の月も今ぞおもひ何し枕のちりの積るのみと物語しけるを貝五感じて作
りける也此女のうち名のかぞ布といひハ陸奥の気の津を布団どせバ之も弦安

いかゞき庭もきらびやかにせきばくハ寂寞之趣向なり

一 忠臣京土産四段目牛若丸ニ而角前なり是ハ桂暦とも以ふ古段目金山物語
是秀衡牛若丸ニ謀叛を進め金の出る前を物語なり

一 神楽獅子太夫浄瑠璃ハ市川海老蔵柏莚作元祖河東節付ワキ河東文三住山彦
源四郎並付中村座ニ而興行ありし此時分ハ周の盛の時世の中富貴也
て國家豊なる御代ニ米粟満山ニして民も悦びし時節也 香炉ハ文選ニあり今
此平安城を李斯の事之狂言ハ本苗芳我之大坂の浮瀬屋五郎が事を作中へ
此文のうちにかゝふ男山ハ幡きぬ色好みと云ハ柏莚が事なり是居大當り
にて嵐市右衛門押破し様の大入今ニ云伝へしありなぶしつねがいろのみふうし
と以ふ桃云葉ありいのきんかうハかうけいろも唐土蜀の国ニて錦を織る蜀江
錦と云ふ錦を云以ふ華陽国志ニ見へたりからの緒のありハ古き書あり

一 竹馬の鞭此より享保年中の頃京橋辺ニ柏木屋家と云所ありしニ甚御と云美
男奴世ニ诵りし書人様背柄中ニ無者なりしが市村羽左衛門と成て心易く是

居ニて狂言の雛奴の狂言を致す風とも也を竹婦人ニ出る彼に作して書き居ニ大
の狂言也しかし其付元祖河東ワキ河東文三住ヶ付山彦源四郎並居大當り之
文の内ニ雛奴と以ふハ甚御なり桃色と以ふハ紙指朱鞘の事之

一 扇ハ京中馬の鞍山彦の之浄るり一時源四郎節を山彦と改めし浄るり
此より二段目興行ス 享保年中の事なり

一 小袖模様ハ和国美人前坂きひと以ふ浄瑠璃の内なり奥州秀衡と結城七郎合戦
此時秀衡方へ忍びとなり居るを七郎妻人の娘ありしみなし尋ねまいらせて奥州
仙台へ行御尋ね奉りしニ此所に宰を入置しを娘有て父ニ逢んと神仏祈願
し宰番の者へ近付我父七郎ニ逢せたまへかしと頼へども中々聞入ず何とぞし
てあはせ給へかしと面白き舞を舞ふて見せけるが見事なりと進めしハ番人うなづき
白拍子を面白く舞けれバ好せよと云ふ其より仙台の大相色と以ふ是彼色へ行て
面白き模様物ならん夫ハ亭主色々成模様を出し先き番の武藏
野の一村すゝき穂を出て乱れ逢たる深模様其より段々みんせられハ乱れ咲此

りとて採使吉右衛門殿を遣はされ夫を召寄仕置あるべしと彼みる事長將軍を見たう
まつり彼者共ハ仏て番人に鼻を初めんと云ふ番人ども勇る事一事なれ
ば舞を初めんと云ふ所に扇おつとり舞ふを番人見まもりて居眠る
彼女ハ附そと軍の後をねぶきり兼押ひて又七帝を伴ひ何方とも行去
る今に他事ハ大和国とい長谷寺なり

一 此の為の浄瑠璃ハ享保年中元祖河東此の為由来紀を写し元一夜の間ハ節
をつけ作る河東夕ハ三味線弾の起りハ元祖蘭洲の弟子
知るべき浄瑠璃者何がかこまるせんと工夫せ仲間少し直を作らせ
吉原の元祖浄瑠璃覚し為時蘭洲河東ハ共に居る河東夕ハ
是を稽古中なる蘭洲行を渡しまた席を立退と伴ひ居る席文を読半
枝ちご法華と云ふ為を云ふの作りを絶別けて今ハ中して行所と語
り物を云ふ字を沢河東ハ有んで加きうるうんと語りしを今ハかうきう
ちうんと語るなり ○時より絶て蘭洲ハ頃このように作りしを河

東ハ尋ねハ是ハ半夫ハ習ひ由語る蘭洲答て半夫ハ薩西節なる義
由是浄瑠璃なり別とあき節を半夫ハ習ひ
ぬ人ハ蘭洲も只節なるぬと呼せ云伝へ

一 一説川ハ浄瑠璃元祖河東一四ハ遠音ハ橋川ハ座形ハ出て世ハ河東夕
丈ハ人ハ三絃の義源ハ節なる時ハ賤業事ハ葉ハ人なる
此大川通船も雑戦の事あり三四ハ遠音ハ義形なるなる是も図ハ出て世
あり旅く変事ハ物あり七四ハ遠音ハ浄瑠璃ハ池の端為座
世ハ有野ハ大ハ二階も義なる年あり一説川の浄瑠璃なる百姓も図ハ九株
してハ載集ハ物ハ為なるハ作りなる百姓も図ハ九株
ハ義形なる内甘泉座ハ浅の時の座の名あり松樹なる年絶是ハ樹花一日自為
業ハ行り中川の永きも絶ハ新の為ハ作りを以て

一 三番叟ハ浄瑠璃ハ半夫ハ河東及破強ハ付半夫方ハ為作りし門弟の
中ハ能ハ夫ハ世ハ世ハ七百の植女三番を作り作りしを為り出来ハ

面白き九河東方を渡り伊賀合せ上りをうらんと又風雲の為新坂を
なつかしの仁河東方へハ破損ありとて半をまち方へ出て見ひ見へ
るふ牛迄甚なつかとゆふ者有りしゆ又八方の山中とあり二三版も相違して
ゆそ三番目ゆひ見へ人ゆ河東方へ出ゆけ宇治河東へ渡り関屋宇
平次三郎と渡り直ち関橋ゆ三條ハ高宮帝源迄ハ元写ー寺源
四郎ゆ見有直ち渡り迄ゆとをすやをいちやと渡りし平宮帝河東の所ゆ渡り
やとちやと渡りゆ四方の内ゆもみ宮ハ程の宮ゆてまいちやと渡ゆも三路とあ
宮ひ程ふ物ふ心ひ海の為とゆふ所ゆ是もいつ比ゆりゆゆふ所ゆ抜ゆゆ後
十郎ゆゆ関所迄ゆハ今ふ古風の西ゆ渡ゆ平宮帝河東行きゆ渡り知と
せーを是ハ知けゆも出事ゆ今ゆ接渡ゆ知ゆこれの小屋ゆハ文七
郎ゆ上ゆ平ハ中古夫婦の大ゆ遠ゆ知ゆとゆ知ゆ知ゆ経陀羅尼ゆと
以ゆ是中樂家の秘事ゆて浄瑠璃の上ゆハ無ゆ知ゆき事ゆ
新世帯元祖河東節附之絵ゆ所初代源宮帝登ゆ男ゆゆのせいやゆ三

枕ゆ多ゆ残ゆも之越ゆゆの為ーもきい拾ゆゆを引離遊び法ふ紙ゆの枕ゆ殺ゆの
言葉ゆ世ゆらゆ繋ゆ松蘿也蘿ハ蔦ゆ松を巻ふたゆ蔦を喜ふゆ為ゆゆる所
絵ふ所ゆゆきゆゆの為を破損ゆ夫婦の別きゆゆを以ふ徐徳去と以人無乳ゆ
夫婦ゆゆふ猿を中ゆ割て分ー一ゆをもてゆ後夫を去ゆーふ場合ー事
西京雅記ふゆてゆ所と知を知ゆたく結ゆハ荘ゆゆ妻を失ひー者逸をゆ
為きゆ祝ひーゆの行を唐ゆも大和も悪ゆゆ是ハ中の妖狐の化とゆふ法ゆ
はゆゆゆとおきゆまゆハ世ゆ去ゆきゆゆ離を離所ゆ姿をいゆゆ多ふ意味
ゆーゆ或人云離の猫ゆの為ゆ多く蔦の所ーゆゆゆ所ゆておきゆまゆを
世ゆ白蔦の為とゆふ意をゆりひ出ゆくゆふりやとゆひのやゆゆびふりゆ
きゆ雨為を法海ゆゆいゆ為ゆゆ海の八ゆ為と以を為ゆまゆり
ゆりゆきゆゆハ切の点滴と以を猫ゆ雨の先ゆの事ゆ三新詩ゆ行ゆ去ゆも切ゆま
ひゆの猫の妻を為ゆ婆を以ふ聖等猫ハ家ゆ養ゆて聖ゆ後猫を以ゆ夫木集
ふ者ゆ為ゆ下ゆ行ゆくゆの猫のとゆりかく事の為ハ掃為を云ゆゆゆゆハ云

んかの人を云ふ迚しかるに仏同の名りけげうしやこいとうの竹冥寺内と云ふ郷士の
しが村中の者ふ惜を大きゝ沼へ多年迚毒龍を殘怠るおりし蛇毒と
なりて人を恨怨しを後を作る大明神と祭り毎年祭礼の打るハ村中の女
花笠を頭を冠り踊るなり夫を一生ふ人持つる者ハ二つ三つも打
新者ハいまゝしめかを勢程ハかゝるなりて粉をうゝるを和ともるなかをぐらし
やといふこれ老ハ離の心をし抑蓋の扉とハ離人所の筥の蓋を門の扉なり
なりしるこ東花門とハ東華門と云拾芥抄ふ云たりけや南門の皆の者と
ハ官人の大内へ上直をを云なりぐんふ皆を金を瓜畑ふ入ざるなり梨木ふ冠
を生きぐるハ変りふとなをとふ所なさる 郷なり

一 駕籠布団若衆 三経源宰相 夢我狂を文の内ふ古歌を浮世の内ふけとハ
古歌ハ夢を後姫しきをとり後負をとゝ名の夢歌若衆若衆三経源
なり所ハ茶漉ハ樂のなり

一 伊勢物河東の仙蓋山尾張 時駕籠布団 此物を語をしるの出
意なり古歌を浮世とゝ者を浮世と語り出せ所ふ出るも出脱所て出襲
美頃歌を伊勢のよ初代東伊勢物語ふ云ふ所ふ出るもの浮物語なる
まゝ云事なり常ふ心なり

一 反魂香 伊勢河東 三経源宰相 なり 赤穂御芝居の奥所の中村写
十郎 作者三宮業四郎業の敵づり 古今集 序ふ云殿ハ也ども写りさき
業の言を写葉をとのぞりせり遠近のたづさをたるを中ふおがつるくもり紙
こもうの業の葉 山祇のひしきもの 伊勢物語ふ 薄の家 移る者
んひしきもの 物ハ神を 清ふ云 物と云心なり

一 清盛ハ京 浮物語ハ世ふ物語と物の間の一版なり作を物語なれハ世ふ物 浦地
ふ月ハ京 ふもふきへてハを歌ふ云月のもちなきてをのようなるもハを
なり十五日へきよ老の少のうげ是ハ唐の杜荀鶴が詩ふ魚を船なり楽て角ハ
源を焼ふ作を茂家の右文と云人将門追討の為関東へ下る時清盛が関を
出行をおもひ出して詠ぜ 古事談ふ云なりかうたの侍の家なり

一 四季の讃ハ今歳四桜狩といへるうちの梅なるものなり 是ハ初代半太夫章大庾嶺
の桜花大庾嶺ハ唐の山名なり 此嶺梅多し 詩ニ大庾萬株梅と作るゆへ文
字をとりもちへて此四季の趣ひハ浄るり此文をとりて書たるゆへ常楽我峰ハ極
楽の風をいふ山嶽峨々とハやまを云へさかしきなりはつくん翁ハ炭焼人なりと
なりの炭焼翁としを経て頭の雪を拂ふおのか袂ハうきを見れど冬を待ちてや
きしきも背をとゝまり 売炭翁ハ白楽天が文集ニあり
一 いの字扇ハ此の字五十字なる内へいのしの扇と名付しと云事也 及ハ字手次ハ河東
節付三弦十寸見東古自作文の内一例となる男もきと云事 文立のけしきの拵
扱ハ男此扇ニ密しといへる事之五条あたりの物語といへるハ源氏夕顔の巻ニ
あり 源氏ニ、其の段なるはさし扇の段名不知なり 腰ニさしの儀をとりて
一 天皇悲のだん平安城都 宮の関之出来事 御文の内なる所にあいて有るもと
去る所を云女中のもなり 今も内中と云 道中 稲舟の義上川のあれハやる稲舟のいなハ
此月ばかりおでハなひといへるなり 大和言葉ニみへたり

一 嫁入五人曽我元服之内中之五裹の紋ハ天人の花を云 五裹ゟ内かさし此花
を用る事なり 花嫁菊を是ニなぞらへたり
一 濡扇 桑名河東 節付 宇手次 河東三弦 東古自作之文ニたゞ逢事まれにおしき
たゝむしるハ單之宴の時ある物之古今ニおもしろき情をひきる数ハ唐錦なるまくお
とき物かぞふるは廿日頃ハ庭やせて牡丹ハ廿日草と異名をまたれハ廿日頃り
ありたれハ庭もやせて淋しくみゆるとなり扇ニ牡丹散かゝると云ハ花に蝶のみやハ物を
いふかく散らくめる それをあふぐさみて其上ハ露もものをいふといへるなり 知識と云ハ枕
なり我が物ハ枕さへも其我なくハ覚えも事もゆるし情る事我知らくつる 知識
ハ枕なりといへるなり
一 千年の枝 細川河東菊江の浄瑠璃之 初代源四郎の作を誦る文ニ錦をくる
福禄寿錦を祈る之すゝて語る々深きとハ扉のうちなかのうへくりて深き道之
詩にも黄鶴樓といひ爾も から錦 水くゝるとハいへり 志川へをうつる 松の道
風かおよく萩中と見ニ 風の吹く枝をいへり 志のへを洗ふとハ 松の小枝を 浪のかせ

以前より後捨ては[illegible]風吹けしかば住吉の志[illegible]を洗ひ奥の志[illegible]流

一 常陸帯の摂津次源氏節付三絃二代目源氏節の文政年中流行駒形の駿河屋にて奥の方より文ふ洞水たるく天谷の水のごとく古行ふあり

一 唐国扇元祖三絃初代源氏節の家元白樂天の琵琶引の図とあり新吉原の二浦を尾の事を引て作詞なり

一 夜の錦元祖源氏十三回忌ふ享保十九寅の秋池の端茶屋にて奥の方より字平次河東節の書いき河洲蘭洲吉住源氏節ワキ弾河良源氏節ワキ弾いつまも初代文ふ白鷺ハ是ハ宮国船の帆柱を引ては時舟の本をりえ出て字平次源内より乗代後通りを所絵書を詠ひ引をを始く主屋り国ふ面白き所ふ感じ出をり

（今より出洋強程斗ハ半ユリなユリレイセイ三重シヨリナシ

一 乱髪夢の編笠ハ元祖助六屋ふ初作り節付ハ字平次河東ワキ河洲蘭洲奥ハ

いつまも初代之三絃源氏節ワキ弾源氏節字ちゑ門井ふ狂歌ハ森田屋ふ中村名

十郎多作事狂言ハ市川ふ初七大当り此事ハ又源助ハ川端茶屋ふあり

白鷺ハ[illegible]の錦より[illegible]ハ[illegible]見れば足[illegible]ハ[illegible]

東屋水猿ばまち堤埋切手和深川のものお表ふ[illegible]ハ頃い

寛保二戌年ふあり

一 京童是ハ歌日遠目等の内五版目ふ古来八文の内振袖の源ー撰挙ハ月足草

九月ふ[illegible]ハ菊宴を[illegible]ハ[illegible]月九月の文接し事知ま[illegible]ー三絃引

[illegible]迎ふ[illegible]茶弾を[illegible]る図[illegible]の大[illegible]と[illegible]三井寺観音堂の[illegible]結

撰歌社有尋ま[illegible]ハ鬼子母神のー初代ま[illegible]ふ節付ふあり

丹前里神楽元祖源氏節ふ有中村座ふ中村七ふ助ふ初演ふ市

村羽左ふ安永年中ふ和ふ作事ふ[illegible]ー文の内[illegible]

い古拾ふ都の[illegible]ふ面白き[illegible]元を立風て付ー[illegible]

カイトウト云節ふ有六部の海[illegible]を[illegible]念仏ふ[illegible]節ふ[illegible]節ハ表裏有節ふ

一 簪の錦柳の残雛暫羽織[illegible]柳[illegible]筑波二[illegible]ふ[illegible]ハ文ふ[illegible]十郎と

[illegible]より[illegible]節付ふ[illegible]源氏節ふ[illegible]ハ[illegible]ふ[illegible]ハ[illegible]

九郎源弾孫四郎宗右衛門右四たんの浦より是居りの

一　廿日月宮平次河東世四郎ゟ伊勢国河東名ゝて初めその節名人ゟ矢を伊の内扇八郎ゟ節付を請ける伊勢国節付名人と云伝ふ

一　秀郎盛元祖河東郎右衛門三郎　初代源氏郎文を雪たまきと風情物の白を以て

一　信田道行八神力山縁結初年ゟ有りの内沼と狐弱り代信田の系長サ三拾六町横三拾町系中程ゟ狐稲荷ゟ系ゟ元弱と寺一ツ系ゟ有り只信田大明神社別当八幡松院支ゟ八下り信田村西裏ゟ信田の森安ゟ高の葉社ゟ帰ゟ森田九郎ゟ尉ゟ中ゟ文の内ゟ中ゟ男八狐人ゟ寄ゟ中ゟ弱ゟ中ゟ責ゟれ八黒ゟ蔵

　　北掉麻の孝

一　雛の祝元祖河東郎右衛門三郎　初代源氏郎右衛門文ゟ中ゟ中ゟ中程ゟ之ゟ事八西ゟ中ゟ中ゟ中ゟ葉ゟ人ゟ中ゟ　大和ゟ葉ゟ人ゟ中ゟ　屋敷の屋風　黒ゟ出治河東名治浄瑠璃ゟ出永年中柳橋河内屋ゟ出次郎ゟ名　興ゟ

一　道成寺八忠次河東志明五郎ゟ天明年中濃ゟ駒形町鍛冶屋ゟ出ゟ

志明茅場町砂洲三郎二代目源氏郎右衛門弾右衛門上洞ゟ二朝上ゟ大出ゟ黒浮利能貴賤雑集ゟ白ゟ強ゟ面ゟ有り

江戸節根元記下

一　柳の曲元八伊勢河東郎右衛門三郎二代目源氏郎右衛門名弘寛元政十年春南ゟ出柳橋河内屋ゟ出次郎右衛門ゟ名　興ゟ

一　霧の二葉　初代源氏郎右衛門十七四ゟ忠延　喜浄瑠璃　忠次郎　河東節　附　柳橋　国芳　ゟて　興ゟ

一　山田八本銀町ゟ弁慶ゟ鬼ゟ三ゟ弱居十七ゟ賀ゟ京川白猿ゟ作ゟ　忠治河東節付三郎二代目源氏郎右衛門　接ゟ作吉内田ゟ事ゟ作ゟ　浄瑠璃ゟ鬼ゟ　仁侠ゟ善光寺辺ゟ人ゟ有ゟ　浄瑠璃ゟ市川国平郎ゟ　ゟて　興ゟ　寛政年中　ゟ人ゟ有ゟ

一　当国の藏人信義河内国石川郡に居住し寛政十壬子年夏当国温泉郡方面に出
一　湯田川の浦猟師に毋木木と云る者ふたりの者ありとい
ふて居たる者多くして其方へ行て見ると云大和云義と見えたり
一　故に僧人宣十八代後醍醐帝北御宇に当国那須郡湯田の郷と云不物野郷
清宣御国不肥後国城將豊秋宣の姫えんの形世に清き仁義正義智恵深
き者夫婦時を共に時を勝者として五つと三つの男子ありて大將清
宣御田郷に当国主に成に帝豊次を出清宣に逆命の同
不忠和倉平左衛門なるものなく旅篭を稼ひ夫婦男子湯女を設
集へきよう多御平左衛門平左衛門に畏おどかしく湯女共出て家来清宣酒宴行
是大將の平左衛門を清宣なるを思へ温泉郡行きしなるを出等なり平左衛
門の存ふ申の湯女の内り尾上と云る女を出へ温泉を上る付た
お湯の者の伝人戸根大猪信利方の湯に浸を志る者なるの姫ひ家来一式
無を共時相沢沢を川沢帝宮津殿喜多と勢引連伊香保の湯へ来り旅

宿を極の居りしに勝り婦人おりひ是も湯を浴田中屋に泊る不審
に思へ是を聞て田中屋に信利方を怒り世間に人を無称ふ不面目の者と清
宣方へ使者を差へ乳母ども御へ来へ信利を多の
潜へ入を清宣を通踏込を来へ多の家の及ひ清宣の
信利家来へ中分或家風つへ呼けふ接況堂と云不風上を面出不
を為ちなる伊香保に出て来り御と踏動し清宣旅宿へ攻戦
ふ御田郷を敗る勇士あれとも多を打れ清宣を自殺御田郷方を清宣
へ対面多付去る無に出先へ立場宮屋へ出合戦へ出合戦中上と云清宣を捕
へ敗人宮屋なる信利に清宣へ討死なる主後に帝出先へ立場へ出合戦中上
へ出合戦に二人の者共乳母に帝に清宣に森田の里を立ふ八帝に清宣の川に
て魚の餌食成むるへ清宣へ清宣に帝に清宣を宮の記を
へ清宣へ形見を付四人日来て真なるに無乗のそとふ袖を〳〵て四を送て
或時猿清宣人に宿ちふ我子八月と云に清宣へ物語つくへて物を

生き甲斐なりと考へる事を心安くなりて去年と共存を名乗り合ふて彼俳諧師の後
を慕ひ我が住たる多賀城の国司国司新芦屋義人秀遠といふものを活師として
国司を国活師と俗称なりと相撲の二人の子を国の人々に連れ出し十歳
廿四才の時強者といで立ち出を繁を元活師の方は乱舞ふして相撲を使ひの義雪
をみて強者と名きの時信利は鞍馬の連衆の二歳人角伝に二人の子は字日蓬
彩の鉞を下と虎勇を称り分れ信利はかなりの活師の後を慕ひ沖
を張て酒宴の数年の者紙に数枚の義の鳥をつくりて遠り相撲取
らしめ信利を信利と名て面白き踊り見を上を踊られて上とかどかくなる
踊り初り面白く舞ひ信利をぬいてをるまで数年諸士居眠
て家をつぶす例此居る所をなて二人の子供は父の敵思ひ知たりと名乗り対
てかる信利は酒ふ弾て見物を多勝ふ対れ信利は信連の分
孔心ものなりて二人の子を引連て出家仏前に引出して出家成る
て出家のもの高野へ入る信利は面白く踊る為に喧嘩の信連は罪ふて

隠岐国へ流罪に信利は彫刻と二人の子供は猪義と言義と名乗る猪義の先祖
の俳諧師の光弘を重ん慕ふ信利俳諧師と二人の者に示す為に立入る者
事は旅を信俳諧師さい踊の富士の敵の文句あり切捨る

一 清盛公は上京は京の河東に住居之経古を偽く青苔ふ面あつて古歌の句
あり吉田の小将姫女が事を作りし之高村光雲尾上菊五郎新橋演舞場大当り
あり之みその人の者は力和之事ふ見て

一 由緒の江戸横芸者は宇子次河東之経は初代源氏帝を附助は市川団十郎
総角は二代目瀬川菊之丞之本村光雲自身鳥ひ持ちは遠近の稲荷を
ものかは三名の他力和之事ふ見て

一 男を元祖河東幸之経は初代源氏帝の月活ふ市をきもは絵師の活ふて
うらき京ふすくしい業平の者ふむ心ありて切またる物ふきてくいふ
も鬼のもてくありり伊勢物語をまたり

一 常盤の者芸者 宇子次河東之経初代源氏帝は浄瑠璃は小栗吾妻舞系

揉の院の内より被出之文の内宮様へまゐらせて風北ふ吹り北斗の星をならふ旅床を棲く
ふ萬葉様の月の中八宮を衣をゆるてとかせをとまり憐知思ひへハ上の絹をとりまて
殊の音さこの頃をもへ郎添ふ見えてり錦を織りけるものハ唐土 秦川と云所の女
夫の征虜へ行けるる征伐の営ふ去思の情の中へ折り入て送りし古事あり
松の後元祖河東章三経 初代源四郎 自讃之文の内いちぶへさ 花乃乃えへを初
宮の気色ふたとへたり

一 明神道行 法華経之文の 文ニハ鉄城地獄の事を以て要のもの 自らるときハ鉄城の中
鉄囲山とハて仏経ふとなり 誠ふさやうらムて後ろ さやうよそ之 水のみなもときハ此の
よぞえをと云要の法施ふ なるをうへしあり

一 清貫道行 文ふ行きふぞ 麻生津 近江之ちぎ 花おもぎと云 神の社の前格子る
り越前の気比の宮と云内ふ以て正直捨方便ハ法花経の文之 ふさ曲 不曲を
ときしもさくぞ正直とあり

一 馬山袖 文ふ牛の角文字とハ いの字を牛の角ふたとへしる法さしるのふみえてらる

ふいぶりやあらいぶりやとよふ同し大和言葉之いやるん出てむりあり志やなん
みと語るへし

一 伊達夜行 文ふいりの中 宮きらけとハち宮の官女漢の代の宮女他のもせと云過
ちる事を志らんと宮の血を額月ふ塗る 女をる女ハ其血消へうせると以て故事あり

一 大和昭道行 文ふかくらふ清む 紅ハ縹之白きえ色ものや紅を包ミたるハかくせど色
のとまるを以日枯ぬるとハ 遠き添ひ来てたるとえ行末のかきる 古郷ふ行末のる藤
ふまむ虫の我からふ袖をぬらて あふみ世をぞうらむと云り 海士苅藻之 おきまど召
ふ歌之旋式部むらさ紀式部のもしめ比名え風の添ふ揺をし 風流ふ流る所を
連 とふそさて あらとよむ清らかりハ九折之上坂を云り

一 虎少将道行 文の内志川為志子
悉達太子 釈迦如来之王子之時之名也 車匿童子ハ太子の馬飼なりしろ 志子ハ九
畢そて王宮を出車匿を連し馬ふ乗て 檀特山よ入りのふと大集経ふ見へてり是ん
ゑの花ハ輪廻をて三世ふ流転する事あり迷ひて成仏せざるふたとへ伊豆ニ島の

塩木こるとハ山ふ入て薪をとりて塩を焼為ふなるを云これをしるさバ猿舎山の
谷くも足高山の高きふうけをあきらむる云かるもかくハ猶の此をんとして等を押
和らるる云ふをそ右の庵ハ槐喜葉之苔莚旅の新をいふ

一 三輪の山文のうち山頭ふハ夜孤輪の月を頂き足山の氣色を云山の頂きより一の
月さし出るをいふ洞口ふハあしたゝ一片の雲を吐く是洞の氣色雲の出るを伝く出たる
下りの凱門ふ入て押告出をて月光地ふ志いて掃へども又生じ是ふ月影の気色
庵の淋寂 新あり見るとして為の去りいと静ふ為の去りつへきことく人跡あし
といふ意を庵の西門ハむぐらやとぢぬらんむぐらハ葎の字為草の名也草しげ
りて人跡稀なる意なり 朗詠文選の詩ふ見へたり

一 日蓮山入の文志んしやうが月ふ嘯ひしやしまたるおんりうが雲をおふ晋祥八月
此光を待て書を讀ミ孫康ハ雪の光りふて学文を先賢侍よりも寂寞ハ淋
為ふわめもを一条論語の給日法華經の義を論し讃談せられたといふ意なり

一 山椒本文小栗の陀文のうち廿日の本をぞくさん辺どいふぞり 粟散辺土と日本を
たとへ粟をちらせるごとくふ為る云小国といふなる云仏經ふ説く秋津洲の内が日本
此名あり 内外の神の恵ぞと伊勢此内宮外宮の事なり

一 龍の袂ふ袖文ふ男ハ不断の伽羅を焚月常住の燈朗詠ふ麓破てハ男不断
の香を焚き 康落く月 常住の燈をかくといへる詩あり

一 蟬丸之陀目文ふそろん山光り無く闇路ふ灯火うけもろしと誉天ハ空ふて
光りあく闇の心日轄も見へぬといふ事是ふ 對句ふて月の見へぬ心をよみやさいれ
志ゆうさん当にハ無量のかうらもきえそとの 罪障懺悔されば無量の業もけた
きゆくハ涅槃文ふ委敷説なり

同道行のを得るふせん被遍照がよみし杖ハ偕西遍照が吾ふ此杖ハ君代る
みと法く為也ハ千年の坂も出ん為へ云々同道坂ふかへるハとめる三五の男是を
植る三五八十五夜の志や志ん思ひ是ハ山ふその行法ふて捨身と書く釈迦仏
雪山童子の時捨身せんと志ゆふ在事涅槃經よろくたり
同笑の陀中一第二の給ハさらくとして秋の風輪を拂ひて拾いんのおつ第こ寺学

宮川の里 蝉丸のあはれも四ツの緒あり各附句あり 琵琶の音にたとへて旅経
も見ぬ松風にたとへてり第三第四の絃と申べきを返して第三第四の五蝉丸の此手にて
見へて云四の絃をうけて於るなりける時にたとへて小の句をおこなり 朗詠に見へ
老松の桂ハ青海ら是ハ薛羅なりつらねの名を列る故事なしかるらね色を
いふ情けけり変わり人も知りぬハを云ふ名をだんきをいふ
でるふあはれ久盤渉調 水の調冬 平調 金の調秋 皆琵琶の調子なり
同悟の段文に瑇瑁を飾りて頭に金花を立並べ鸞輿飾車ノ玉衣ノ透間ノ
風モ亦襴綾 蜀抄ノ玉衣 飾車御所車なり

一 同鐘の段文に愛別離苦の義利一首に三世をあらはせり此句蝉丸の寿の耕をいふ
終わりなきものなれてハのもう愛別離苦の義理をあらはすとて
抑此浄瑠璃ハ此為の教の道ありて能芸能書は能芸の悪事 写を以て
くらふる上るり小節の流をいふのなし 以来も同じ 標之浄瑠璃三絃大和しまれ
遠なき節なり誠に十寸鏡のかく成此へ 苗字を十寸見と改まる

一 助六廓の家桜 節付 此浄瑠璃ハ趣向して語りし節を付るに不寄実悪
男女老若其音にて曲を語りわける様に音曲と名付るなり 角力物語をかたるにも
其の心を思ひ語るべし 能音声此との向よく語らんと 俣野を美敷語り出
を勝く語るも此ありたとへバ 俣野ハ中村助五郎 真田ハ市川門之助 河津ハ大谷広
次 此役者の心持を以て語るべし 又曾我五郎時宗ハ市川八百蔵 門之助
比奈ハ中村仲九郎 中島三郎太夫虎ハ菊之丞 半四郎 其余心持同様なり 然と
浄瑠璃ニ遠ひ江戸節ハ言葉多く音も節之此道に入ざれバなりかたき
事なり 外の浄瑠璃ハ老若男女の言葉を其の身につかひわけし思へ能きかるえ
寛保年中延享此始より江戸操人形も江戸節を興行す又京坂ハ上方芦
とあり 今も佐々木と云ふハ大佐宗あり 此名と以て又ハ紀要節 其中の芦屋を
小藤摩あり 是皆元ハ江戸節にて 興行あしなり

一 浄瑠璃語りの口伝口明建て云回し 標之呼吸の心得第一 此川ハ
かけも留りで編笠ハ三郎 名鉄ハ収めきかね 兎万歳ハ四つの業 清元を

法見さと名付て影横ハカ芸なる事の極と天思て灯火酒中花ハ一ときの色
いとまの浄瑠璃ハ日数を数へ〜心を潜て語るべし
扱も千歳曽ハ語り出し物の始ハ芸なる事の三ツ語りとなる事多り蟬丸祇樂物語
乃初めて出る放下僧初年ハ和尚我ハ芸なる事法ハ仏の心ハ〜し因〜よりふ
語るハ心ハ遠ひんさ有ても千万の根元を尋るハ芸なる事音曲ハ唯上京の物語伏見ハ生佛琵琶法師と云る盲人ハ少しが心安く彼法
師と云る者ハ心を学〜考へ居て新敷事法師ハ何を考へるやと
尋ねハ世の仕合有りと哀しく法師和尚暫く考へて高野の考明又ハ
寺のそれおりんみれいのよる有る事を聞て岩船瀧昼夜角へ伝へて萬石よりハ種文より出る行浄
瑠璃ハ初りと切るハ静ハ語る〜
抑浄瑠璃の三絃初りハ信長公の時琉球より初めて渡りし時ハ語る

弾もの有し将軍の御ハ伏見の盲人琵琶の名人をよびよせ〜三絃付ハ琴にて弾
有しハ琴〜と有り彼法師三ツの糸節を以琴廿五絃の音色を弾出〜ハ
時将軍大感ひ三筋の糸四〜三線と名付く以の法より味の字を加へ是
有れ語りと世事演ふるとて夫より三絃を取調る二上り三下り浄瑠
璃音ハ今を有り但絃又浄瑠璃一節ハ章と唱へきを節と唱へ
を弾ハ流水破作の形有ハ清ハ流と云へとも浪も有り湯も有り川りそハ色〜
の音色ハ又破作ハ先ハ上ハ節の長短あり丑初ハ二ツハ割付ハ色〜の節の
音をハて節と名付る扱も節分の初りハ或秋矢初の長ハ浪天樂
舞と云る樂を付〜ものハ笛吹ものハ是術ハ笛ハ初ハ牛若丸
要ハ初り北ハ矢初の黒ハ止篇有ハ須ハ夏の熱き秋ハ冬の極の迎へ
細源〜ハ有ハ天樂の音面白関りれハ近寄ハ琴の仇者世ハ掃部音
色を感し山彦〜ハ蟬ハの笛を吹出〜と長ハ地の中ハて天樂の舞ハ
合ハ吹ハ長ハ浪聲き是ハ天満宮の宮ハて今の世人も聞く琴を出ハ

箇も止りあり 彈バ又吹出を堰の分に流のいろんと絞筆に畏く側ふ〳〵たる流
泉と云る女中月は十五歳と云る人の女を召て志をり戸を開と考り
出んとせ〳〵不を側るを見て牛若丸を憑〳〵るふ〳〵くの人にて
ありやと尋ねとも返答もなく居るを長が娘小竹殿を語り給へ
牛若丸は〳〵石長が娘小竹はいかなる人と三人の女結して因人の小竹より是を聞
り戸と名付合泉寺しを レイゼイシナリト云節ハ是を受て名付る三人の
三宝の踏脚をり寺を之を云 三つ乳三三九ユリ又三人みて上を云
三三九ユリとりを二巻をて二九十八ユリを下三宝と唱まるいろ〳〵の三寺
之カイトウト云節ハ云那の法道ヲ三ヲ念仏をとりし節之は節ハ
表裏ある久〳〵キトと云節ハ都を鉢櫛（ハチクシ）と云ふ物買の名〳〵是より為し節之
河東と云事ハ為ハ為と唱寺しハ長ヲ娘岸の薬師殿光如来の
中を之仏を法華経を名付と名付し如来の寺を丸と深く剛深る事を十二年
をうをを十二陸ふを以て法華経中の仏陸国を語ると唱ふ丸より考

曲の異名とありし為ハ元祖ハ法を宗筑紫の善尋寺金剛法遍和尚之今経
文より為と云を為より光船丸より生仏経経法華沢角仏
丸世ふ弘ありし為

一 二代目長ふ河東と云る辺を居るしを伝を助河東の区
河東と名付合 是を為ハ 伝ふ抜り事も為て弁双方ふ河
東と名付ても不普名を伝後を跡ハ伝を助負之後ハ云る金剛
河東二代目河東と名付本拠所芝居も節也後源の所横屋善八節と云る
へ河東を張り迴ふ出り善五節河東ハ今ふあり初代より三絃国安新源節
和節〳〵善二節也三ヲ今の善三節ハ二代目秀弥が者也川也弥ヲ
と云ものあり

一 伝を助河東新ヲ為子節の為を東絃へ張りをとき河東を東絃の為を返し
為十節と改名の為を〳〵為ハ付太返善評義の上忠源節府内や文次節為人
を考〳〵武蔵為名儀中為東絃為ハ為合ヲハ為十節みてハ

此出入ありしかくしく事都豊より河東と彦十郎破談なり
彼是節河東死去の後ハ河洲河東養子候沙弥町蘭洲へ河東名跡の東
雲と改刺髪して暫く年を経り彼是節弟子と茅場町宮家忠次郎河洲と
改めしが後て沙洲と改名せ三代目彦四郎と云ふもの彦十郎及破談候後頭
是彦十郎人の面皆に東佐と成此者幸初年肴木所多田の薬師の店借
居りしが其後又家を吉原町に住居し五十歳を付錦絵出物店に弟子此者
方ヨリ住居を極め寛政十年の秋判勢ある子交と改翌未年七十三歳にて古
人となる　同門弥兵衛年主は是よりある女房屋がしハ是も東洲と名を改浄
瑠璃家吉原町に住居し安永年中数続より日本橋ひもの町に住し
寛政十一未年古人となる

一　寺ハ二代目河東弟子東水と云ふ者祖田佐久間町　若狭屋市郎兵衛と云し庵也
右同町に住居六十才の比吉原町へ引越寛政年中古人と成東晓と云ふ者ハ湯
しま切通し木戸之家よりのあり宝暦年中古人となる　東雅ハ出生本所元町

浄平金紗にと云ふ伊屋へ養子ありし後浄瑠璃語となり後に成ハと云ハ
和年中古人となる

一　神田新石町文次郎と云者浄世成華高家住舞河東弟子と成文東と改名を名
乗るもの柳橋并次郎方にて貞節名乗の浄瑠璃理丹前里神楽之時楽屋にて
行てる處の文化度やき大たんが人気めへといひしが評判出来る事に成り仕
合に花を咲かせ其後業成を得て病屋をもち文京の名を河東へ返して高
間にちん居し其しかるが寛政年中古人となれん

一　浄平蛎殻町忠次郎河東弟子となり後ニ者国わこ新町の者にて河東養子となり
沙洲と改名し隠居となり其年七十余歳にて寛政年中古人と成隠居沙洲
妻河東ト改名吉原京町四ッ目屋善蔵と云者文魚事なる其文洲と改めしが
其後河東弟子と成沙洲と改め浄平沙弥仕和年候事同門にて東雲
と改後沙洲と成業者ト云者樂水と云しが後に蘭洲と改名蔵事宝暦
年中古人となる

一 佛蔵河東弟子新妻ニ金七と云者 茅場町の河岡が弟子ニ而佛蔵弟子ニ成り
東示ト改 深川仙台屋庄五郎事同門ニ而東栄と改 神田多町ノ金屋安兵衛
ト云者 寛政年中両の弟東和と改

一 元祖河東 孫四郎ハ出生ニおゐて声けん在の修験の弟子成しが 三絃鉦ニ而当地ニ出
て 本村又八が弟子ニ成 三絃弾と成 世ニ名人と名を継て 弟子孫四郎 譲秀
次郎ニ名を譲り二代目孫四郎と成 是も世ニ譲秀次郎名人 名を思ひ繁栄を制
存候と改 寛政年中古人と成ル

一 文化四丁卯年八月廿日 向柳橋河内屋ニ而 魚ホ深氏十二代 浄瑠理供養
節付佛蔵 河東

一 女ニ而二代目源四郎弟子 中橋ニ而足津 新妻ニ而蜀演 東仲町四ツ目
田所町ニ而 也免

一 明神河良弟子 赤城ニ而文志 神田明神ニ而扇志 三代目河良弟子 浮世小路加賀柳
橋同朋町ニ而 演 坊町

一 佛ニ勝河東の後 宝暦年中中村勘三郎座ニ而 狂言を催し 其より
上音古今ニ無之 絃類も無く 伊勢参宮ニ出立致し 二月下旬より
初め候而 看板等出し 中村座より太夫方へ申来候ニ付 返事ニ及びければ
中村座ニ而当惑致し 河東菊 違(?)不承知なれば 無是非 太止
候様 様子極り 其元ニ而 継 太止之事難成 夫半太夫
太夫極 初しなり 向後此芸ハ河東太止 半太夫弟子太極ル 例ニ而
中村座ハ半太夫なり 市村座 葺屋町ハ河東節なり

一 河岡切通しニ而平野氏と云隠居 異名市種と云 此仁ハ 平四郎河東の弟子之
江戸節三絃鉦ニ而 弾たる 声 能き 音節 年間拍子之ツ 引子世の
名人之 寛政三亥年六月 六十七才ニ而 古人と成る

一 浅草黒船町大和屋太兵衛ニ而 東の此名ニ入同門ニ而 異名文思と云後ニ 森田
町代地河岸通りへ住居を極め 是も能音声ニ而 節拍子能 語り之
同十二申春七十才ニ而 古人と成 名人 并 近世の名人之

一　享保二戌年吉原村名主杉山藤兵衛隅田川ニ路考市川と云突出し文政ニ路ニ而出張ス隅田川ニ沙洲出来ル東永三丁源四郎所長新九郎文政年文政年ニ新ニ出来り

一　山崎宇右衛門の名を譽しる者事少の訳合ニて破産致し身を崩し名代浮世も難儀寛政年中ニ成り河岸ニ身を入れ浮世ニ稼年月重ね順調ニ成る出席いたし居候久兵衛ニ世話ニ成る

一　明和年中の比吉原田宿川辺人沢庵出所ニ有之延宝二三年ニ浅草田ノ町ニ住居候ニ付吉原町行屋と云て岡場所ニ成り

を始て江戸第一番ニ成り商売中ニ成れ共遊客人市兵衛ニ成り初て遊客人市兵衛の仕業ニ而きる感心ニ成る入河岸ニ成る出張ス入河岸ニ成る出張ス

ニ成る三丁ハ山田屋町和蝶ニ成る出張ス浅草ニ成る出張ス

安針町和蝶と云者行りしゞ者事ハ安永元辰年ニ月日忘れ人ニ成る出張ス

類焼ニ成る文政成亥上ニ登り十二月と同年出来ル時ニ田宿ニ成る

丁ハ文政暦ニ路ニ成る出来ル

天満の表門入口ニ成る江戸第一番ニ成る寛政元年の表第大

坂ニ成る江戸第一番ニ成る不思議ニ成る稼と皆関ニ

浮瀬理ニ成る対ニ旅籠ニ成る事ニ成る

旅籠ニ成る事ニ成る物語ニ成る

ニ成れば有馬ニ入師の弟ニ成る又ニ成る尋ニ有馬より

ニ成る年九月ニ田ニ泊ニ成れ

有り又ニ成る浮瀬理ニ成る

一　乙部ニ成る長順目利安初の時ニ成る三丁ニ成る豊後節も弾ニ成る三丁ニ成る

事ニ成る武ニ成る文と名ニ成る文と文の三線の事ニ成る

武の事ニ成る松崎ニ成る松崎ニ成る

延享元子中村屋ニ成る中村屋ニ成る

為とゝ[illegible]興を[illegible]ふ敷[illegible]と云[illegible]之森田[illegible]豊[illegible]大入之

一 隆達節の日蓮宗の信仰[illegible]泉州堺の[illegible]院[illegible]信[illegible]
て還俗し大坂藥種屋[illegible]氏の家に入て商人となり学に[illegible]曲を好[illegible]小
唄の一流を唄ひ出せ[illegible]唱[illegible]人の心和[illegible]歌[illegible]世隆
達節と称せ

一 [illegible]節元禄の比[illegible]今新[illegible]と[illegible]居者[illegible]唄ひ始[illegible]

一 道念節京都[illegible]念山三[illegible]と[illegible]寄[illegible]貞享の比盆の踊り
[illegible]を唄ひ出し[illegible]踊りの拍子能合[illegible]今以[illegible]
出せ

一 都一中三國[illegible]宮[illegible]國[illegible]桐[illegible]は元禄年中より流
行出せ

一 園八節新[illegible]年号[illegible]延年のもの[illegible]

一 京都宮[illegible]國[illegible]節[illegible]今[illegible]捨[illegible]文吉と[illegible]

[illegible]元文年中宮[illegible]豊後[illegible]と名[illegible]三絃[illegible]方[illegible]
三[illegible]絃[illegible]市義三線[illegible]八三[illegible]國[illegible]節の三絃[illegible]
[illegible]節[illegible]元[illegible]
[illegible]拍[illegible]
[illegible]豊後節[illegible]
[illegible]
[illegible]豊後[illegible]
[illegible]
[illegible]

一中古後押交ゝ語る是中興古後の祖なり近所の名人ゝ来りきはゝ
ゝゝ口ゝ語る志津藤五郎吉光造酒左衛門ゝ吉光と名乗ゝ寸尺事ゝ長ゝ
寸也ゝ盤渡文字吉光と名乗ゝ寸尺事ゝ長ゝ
ゝ能合ゝ九今ゝ盤昌之今の豊後ゝ
津宮ゝ名賀吾妻九ゝ宮山郡ゝ
しゝ二ゝ九ゝ佐ゝ
ゝ説経節初ゝ年号ゝ知延享年中ゝ
ゝ吉吉ゝ天満ゝ吉吉ゝ
と吉逢ゝ
此ゝ人形ゝ古風ゝ
と九人ゝ物語ゝ
一
古近江ゝ八寸ゝ三ゝ
町長浜ゝ

中ゝ二郎左衛門ゝ寛永二甲年七月吉人ゝ吉吉より譲ゝ
上野国ゝ郡ゝ荷ゝ
ゝ

元祖河東

乙享保十歳
釋清西居
己七月二十日

十寸見藤十郎

二代目
甲享保十五歳
妙屋紹音信士
寅二月五日

同　庄右衛門

三代目
乙延享二歳
潭誉澄瑞信士
丑七月廿八日

同　宇平次

四代目　同　傳之助
辛卯　明和八歳
一法圓諦信士　十一月十五日

六代目　同　忠次郎
丙辰　寛政八歳
妙音院正山道榮居士　正月廿一日

極樂の道も有り彩し　梅桜

十寸見河東代〻石塔六代目忠次郎河東存生之
内寛政年中建之

本所牛島
長命寺

本　三重　片　三重　上り三重　下り三重
忍　三重　天皇三重　中　三重　大　三重
クリ三重　カハリ三重　イロ三重　ツリカネ三重
ヲカサキ三重　大カヽキ三重　獅子三重　別レ三重
切合三重　ウレイ三重　山入三重
本　ユリ　半　ユリ　セツユリ　ユリステ
ユリアケ　イロユリ　ユリツヽケ　ユリカヱス
ハツミユリ　カハリユリ　マハミユリ　キリミユリ
ヒヤウシユリ　ウレイユリ　ヤツミユリ　ハコヒユリ
ツヽケユリ　ヒツトリ　レイセイ　レイセイカハリ
ヤツレイセイ　半レイセイ　カワリレイセイ　本アミト
ヤツシアミト　半アミト　アミトカヽリ　本ムスヒ
アヒムスヒ　下ムスヒ　イロムスヒ　キンムスヒ

ノリジ　イロジ　ツナギジ　本フシ
中フシ　イロ本フシ　イロシヨリ
シヨリカヽサ　ヤツシヨリ　イロシヨリ
ハルカイトウ　ニシヲトシ　カイトウ　ヤツシカイトウ
サワリ　アイテウ　ナガシ　ウハル
クドキ　イロクトキ　コウワカ　ナガシ
カドセツキヤウ　カクヱウタ　コサイフシ
ツヾラヨリ　ウサイ　上コトバ　ウコトウタ
三中　ゲキブ　シバカキ　一中
コトウタ　キリヤマ　トサブシ　文セブシ
コウヨクリ　ヨクリ　ナゲブシ　ヱイカン
中ハシル　マキアゲ　タヽキ　下ハシル
トリヨイ　ヤツシ　モミダシ　ナヤシ
ノル　カヽル

△ヨリ　ヨトリフシ　サイツメ　サイモン　ヲトシ　ツチツタ　ウレイ　カタクトメ　三ツビヤウシ　スヱル　カマカヾブシ○ヘ

ヨトス　シスム　ハルカン　キン
ウク　イレル　ヲンド　カヽル
カサイブシ△ヘ　○ヨリシキブフシ　ヨセル　カハサキヨド
ウタガヽリ　○平家カヾリ　○ランヒヤウシ　コムロブシ　ヲシチブシ
アイノヤマ　ロウサキ

カンウレイ
我ゐ乃をゝなゐ竹の
イロシ
神の麓をあくあ[illegible]
イロ本フシ
[illegible]乃上
カブヱウタ
一ツ[illegible]一トツ　墓イ
平家カヾリ
宮櫻　高く[illegible]風
ギヱリ
彩の志のぶふら川乃い
タリ　三重
ひむき　おく[illegible]

ニシヲトシ
[illegible]と斗[illegible]
ウレイ
いた[illegible]
ウタイ
杉[illegible]
タヽキ
[illegible]
カヽル
空[illegible]き月
ユリツヽケヒツトリ
夏こ[illegible]
ウレイユリ
いと[illegible]をごき[illegible]

（コトウタ）
ほとゝぎすてふ
（他三重）
紅葉の萩の下枝を
（下ハシル）
我身ふけぬる
（ハヤムスヒ）
あをひさゝ
（ハル本フシ）
みて宿こそ
（ハル本フシ）
綿がうゑ草は
（ツキユリ）
御代ありし
（ナケブシ）
初音おもん
（ツキフシ）
繻子のきざはし
（ヨミタ）
男や 乗乃
（ヨカハル）
岩根ふ
（ツリカネ三重）
月と花との
（イロムスビ）
仁義有る

（ツナギ）
八千代 初ふりぬ
（ヤツシカイトウ）
あるとなるひとい
（中ムスビ）
おの色
（トハシル）
知人もある
（本フシ）
紫 立
（本アシト）
千代の
（本フシ）
時しも新乃
（アハリ）
こゑ鳴ぎもれ
（中キシナヤシ）
夜はそうふ
（カハサキヨシト）
思ひ 鶏 籠の
（カハリムスヒ）
人ちゑうらぬ
（ウタガヘリ）
渡る 笛きの
（ウタガヘリ）
いふ男ぞや多し

（ハツシユリ）
新この
（ツナギ）
七種あるか
（エイカレブシ）
雪轉〳〵 雪
（カハル）
忽一つの島をなを
（カサイブシ）
八重を 法華の
（クドキ）
ちかき多
（ヨクトキ）
かまなくのこる
（中ヨセル）
元より 慈悲の山方便
（イロ三重）
かきハ能もて
（イロ三重）
実 玄 華 忍ま
（カハル）
ちき ふたうらし
（ヒロイムスビ）
のゝ四きハ
（イロ）
雪下り冠を

（ヨンドカヘリ）
千代の 繁りも
（ヨンドフシ）
糸ろ 薬師を
（イロジ）
知る人を ちらぬ心乃
（カサイフシ）
砂の色も 金ふく
（ヤイカヘリ）
しけ神のをいりく
（イロクドキ）
秋の鶴の 宮を
（コムロブシ）
朝の出りけふや
（上コトハ）
雀 海中へ入
（ヨクリ）
星は 数り ふ大破の
（イロクドキ）
乃 踏多〳〵 塔乃
（アミトカヘリ）
水や 塔らん
（ヒヤムシユリ）
鶴は
（カハル）
坐ひ男ふ 和らぬ

我流髪も
上蓋は扉間も
なりやせんいと
白向学桔梗
大井川三重
いか斗海く
浦る色汐の
千方彩袖の
ひとの見るひ
彩端の梅う
徳若ふ浄万歳
なるよの翁も
翁とも

気みのらぬ
お弱こうやとふ
ゆんどがり
こもるり初ら乃
稲光成炎涼変
新を隠をれ潮法い
紅葉のねせきふ
千方ふ見田新
一葉く送り
いくとせの
巣和田ふ池を
平家がり
心がくい峨くと
平家カ
夫遠寺の鐘の
平家ガ
三千世界い

カマトフシ
ふ秋万歳の
ハル
ろんの拍ふ
ハルカイトウ
天下泰平
ナカシ
秋ふ光ふ
ヒツユリ
三ツ葉ヒツ葉ア
シラクヤツシ
かはさくら
本ナシ
雪花がちるハの
ヤイガリ
しさや巧を
イロユリ
ちら悔や
ナイロ
しくうとも
下ムスヒ
あちくもれ
文セフシ
中以ら
ヤツシヒツトリ
茶屋巧らくい

文セブシ
豊乃内屋ふ池堀
ヨロシ
國を豊ふ
カイトウ
ひろくら
ナカシ
宮砂の尾上の
ナカシ
閉ん後の封み
ハシル
横雲ちらむ
上方フシ
父意ーやと
フネウタ
白鷺い迎ふ来ての
イセヨンド
人目忍ふのもき
ユリステ
あくらけくい
サイモン
ひくぬ女帝の
ヒロイムスヒ
ふどころい
半アミト
髪アかくきば

やっぱりおをし
曽我菓と浮名
すゐ〳〵 円どい
いらぬ女帝の力業
むをこいせいそう〳〵
女ふちんの布
初日ぐや〳〵
三河ふかけ〳〵
東路や
ちをゞ都の人そう〳〵
ゆうれいゆり
ゆうて山さゞれ
君も花そや
大一大万大吉

ばやはしる
ふめば居入
蘿ハ森すゐの
恋はやき草よ
ぼ〳〵事の
三番もそきハ
ふしつなき
ちやうさも〳〵たゝ
本三重
たそや多和
扇流〳〵砂流〳〵
かう〳〵のと〳〵
三中ゆうれい
日照の桜色
本ぶしなやし
大悲やうこの
つゞみうた
春前ゑ雨ゑそ
しゅうスピ
待乳ゑ

こうわかながし
慈谷と名乗
ごぜいふし
木曽ゆみそろ乃
ゆうれいゆり
そう〳〵ほろと
ゆスピしつめ
雲
かつらぬハ
かゆりかけ
袖や袂のふるひ
しきぶし
ちきそうむ
ゆゆりれいせい
裂りし霄も
平家かくり
心ハ八景
かうわか
和光のむうり
ひせんふし
あをハ元より白玉
つなきし
幸ゑそうらぬ
かべル
皆面〳〵

ひぜんふし
ゆ法色〳〵の
せどせっきう
扇そうどきおく〳〵
ひやしふし
法色ハゑ色ゑ
大三重
別色〳〵ゑ
ゆりすて
ゑふまれや
ふしハしル
ゑゑき祢〳〵ゑの
大やハし
花の色ゑやそう
れいせいかり
清見そうと多角
つきゆり
田子のうら
しりかり
袖ハ清見が関
ひせんふし
昔が今〳〵
ハや三重
茶臼のゑ乳
うれいゆり
船底ひき伏

乱入る
我身のよを
乱しふ世
おもひ出
錦を拾ひ
浮世の業や
流しく
嵐吹と
さん色いも
続けつ
殘るもん出の音
朝寝もの時雨も
けいがる

思ひ切る事
思へば
人や頼めん
天津空
いくしや飛ふる
月を迎を
うしとや
大海の磯ハ
袖の雪
秋の月
せきぞくたる
門の北破りし樊會も
目も飽くく

流の身
灯火の
綱もかなして
入相もいつの
古井の次第
とさぶし
ものとハ
よりけ
二ッかしらは
吉と以字と対ふ
拾やさきらの
雪の蓉を
言の葉やや
合の陰るを

かしこい俗よ
ふくく心弱
矣ふよる日と
花ふふく
二ッふ割て見せるき
縁の空も
ちんき志の井
尼心里
洩くふきふの
いろふくさ
道成の郷
淀の川辺

里神樂（カハリレイセイ）
新世帯
一瀬川
濡浴衣
虎少將道行

水調子（ユリ）
扇八景
いの字扇
家櫻

京童（ユリカヘリ）（おきなわらべ）

里髪
水揚蝶
山桝太夫
妙馬

伊達娘道行
常盤比聲
禿万歲

口舌の鶏（おくちもとうし）

子歳の枝（おもひ出る七夕の）
廿日の月（改名をたゝへ）
ぬ
ぬ
る

松の後（たゝとしまりて）
古世けれ
利りり

七重八重花の志をり弟角伊藤河東三絃三代目源冨郎　七代目伊藤河東一世一代文化九申年三月八日西國芳屋八郎
彫ゑ　ゑ　ゑ　興行　書洛名東雲　彫

明治二十年丁亥初秋

筆者

妻木頼徳